



Data

監督：盧謹明（ジェニー・ルー）
 出演：紀培慧（テレサ・デイリー）
 / 陳湘琪（チェン・シャンチー）
 / ジョシュ・ホワイトハウス / 範時軒（アマンダ・ファン）
 / ソフィー・ゴブシル / シュアン・テン / ロレイン・スタンリー / ニール・ワールド / ダニエル・ヨーク

👁️👁️ みどころ

舞台は、ロンドンのマッサージパーラー。主人公は、台湾からロンドンに留学し、就職氷河期の中で必死に就職活動をしているティナ。しかして、「接線員」とは？「ザ・レセプションリスト」とは？

日本でも性風俗マッサージ店は多種多様だが、そのすべてが違法もしくは違法スレスレ？しかし、ロンドンでは住居地域の住宅にそんな店があることにビックリだ。近所の不審の目の中、建物内では一体ナニが？

留学も結構、英語も結構、接客術も結構。しかし、台湾人がここまでしてロンドンに住む意味があるの？自殺したという、盧謹明（ジェニー・ルー）監督の友人のモデルも登場するが、私には理解不可能だ。その逆に、本作ラストの故郷の風景には納得！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■シネ・ヌーヴォでしか味わえない、この一本を！■□■

きっとシネ・ヌーヴォでしか味わえない本作を鑑賞！チラシによると、本作は「祖国を離れ異国に住む台湾女性たちが直面する問題を描いた衝撃作」。また、本作が日本で上映されるに至った事情は、次のとおりだ。

ヒースロー空港で自殺した中国人の友人が、英国でセックスワーカーとして働いていたことを後に知ったイギリス在住の女性監督・盧謹明（ジェニー・ルー）は、アジア移民の現実を映画として世の中に提示するためにクラウドファンディングで資金を集め、7年の歳月をかけて本作を製作。本作は、2017年にソチ国際映画賞&フェスティバルで最優秀映画賞を受賞し、エジンバラ国際映画祭オフィシャルセレクションで上映されたほか、

アジア・アメリカン国際映画祭をはじめ、各国の映画祭で上映・受賞した。そして、2018年の第1回熱海国際映画祭グランプリを受けて、日本国内での上映が決定した。なるほど、なるほど。

■「接線員」とは？「レセプションリスト」とは？■

チラシには、「春を売る家、そこは、私たちが異国で選んだ生きる場所でした。」の見出しもあるから、本作の主人公のティナ（紀培慧（テレサ・デイリー））がマッサージパーラーの受付嬢となるストーリーからはじまる本作の原題『接線員』、英題『THE RECEPTIONIST』は、なるほど本作にピッタリ！もっとも、マッサージパーラーとは名ばかりで、その実、ティナが働き始めた店のホントの商売は・・・？

■英国にも就職氷河期が？それにしても・・・？■

日本にも「就職氷河期」があったし、韓国にもそれはあった。そして、本作を観ていると、せっかく台湾から英国に留学し、大学を卒業したにもかかわらず、ティナは今イギリスでのその就職氷河期にハマっているらしい。もっとも、英語がペラペラなのはさすがだが、大学時代に必死に勉強していたのか否かは、イギリス人の恋人フランク（ジョシュ・ホワイトハウス）と同棲しているティナの姿を見ているとよくわからない。この男、一見ハンサムで優しいのだが、ひょっとして生活力がないままティナに寄生している、やさ男かも・・・？

観客はそんな疑問を持つはずだが、ティナにはそんな疑問は全くないらしい。そのため、明日の家賃の支払いにも困窮する中ティナはフランクを責めることは全くせず、自発的に「接線員」の仕事を選択することに。もっとも、私の仕事はあくまでマッサージパーラーの「受付」で、ササ（陳湘琪（チェン・シャンチー））やメイ（範時軒（アマンダ・ファン））のようなマッサージ嬢とは別！ティナは住居地域内の住宅を借りて違法な性風俗店を営む女リリー（ソフィー・ゴプシル）に対してそう宣言し、働き始めたが・・・。

■女主人、2人の同僚、そして新人の登場！■

私は、イギリスではこの手の店がマッサージパーラーと仮装することを知ってビックリ！また、日本ではこの手の店はすべて「商業地域」に限定され、住居地域には存在しないが、イギリスではそんな実態があることにもビックリ！最後には家主から文句を言われ、警察に通報され、リリーたちが逮捕されたのは当然だが、ジェニー・ルー監督の友人が数年間もそんな店で働いていた現実があったことにもビックリだ。

私は職業柄（？）この手の店をよく知っているが、日本のそんな店と同じように（？）、店の経営者リリーとそこで働く2人の女ササとメイを巡って本作に登場するさまざまなエピソードは興味深い。リリーはとにかくがめつい、女たちから搾取しているだけではな

く、自分自身も生きていく（経営していく）ために精一杯ということがよくわかるから、私はそのがめつきを責めることはできない。しかし、中盤から新たにマッサージ嬢として入店してきた新人アンナ（シュアン・テン）の境遇を見ていると、ティナ以上に悲惨で、何が何でも（身体を売ってでも）すぐにカネを稼がなければならない事情に、つい涙・・・？もちろん、こんな店の経営にヤクザが絡んでいることや、女たちが客からもらったカネの窃盗騒動が起きたり、一見華やかに見える（？）性風俗マッサージ店も、その内実はトラブル続きで大変だ。本作では、当然現地を詳細に視察したはずの女性監督ジェニー・ルーが描き出す、そんなマッサージパーラーでの人間模様をしっかりと観察したい。

■□■なぜロンドンへ？留学の意味は？働く意味は？■□■

難民問題やそれに近い移民問題は重要な国家間の問題だが、違法就業に絡む移民問題も大変な問題。もっとも、それは主として法律問題として処理すべき問題だし、就業ビザの取得や留学に伴う長時間バイトの可否等は個人の選択のウエイトが大きくなってくる。

しかして、本作を鑑賞しながら私がずっと疑問に思ったのは、なぜティナはイギリスに留学し、ロンドンで就職することにこだわっているの？ということだ。もちろん、どの国に留学するかは本人の選択だし、留学先で就職できればそれにこしたことはない。しかし、イギリスがこれほど就職難だしたら、ティナには台湾中部や故郷の六鬼という田舎に戻るといった選択肢もあるのでは？本作でティナがそれをしないのは、ティナの仕事を知った後、態度を一変させるダメ男フランクへの献身的な愛（？）のためと思ってしまうのだが、ティナさん、どうなの？

ちなみに、本作ラストでは新人のアンナは悲惨な結末になってしまうが、ティナは故郷の六鬼に戻り、野良仕事に従事する元気な姿が映し出されるので、それに注目！台湾も近時は日本と同じように地震や台風、水害等の被害で大変だが、だからこそボランティア的にやれることがいっぱいあるし、その中で食っていくことくらいできるのでは・・・？

■□■撮影手法は？結末のつけ方は？■□■

近時のテレビ画面が4K、8K とどんどん美しくなっていくのと同じように、近時の邦画はどんどんスクリーンが明るくキレイになっている。それは悪いことではないが、映画はストーリーはもとより、映像にも陽と陰、光と影が必要なのでは？黒澤明監督の名作はすべてそうだったはずだが・・・。近時のそんな邦画に馴れた目には、本作の映像の暗さは相当つらい。舞台がマッサージパーラーの室内が多いことと、もともとそういう店のそういう部屋は薄暗いものだろうが、それにしても暗い。これは、もちろんジェニー・ルー監督が意図してやっていることだが、本作のそんな撮影手法をあなたはどう評価？

他方、本作ラストに訪れる、家主からの通報と警察による店の手入れ、そして女主人らの逮捕という展開は足早だ。ティナがその直前に台湾に帰国したのはラッキーだったが、

そんな展開の中、ジェニー・ルー監督は本作の結末をいかにつけるの？そう思っていると、本作ラストは、ティナとササとの手紙のやり取り（その朗読）になる。しかし、あの店で働いていた当時のティナとササが特別仲が良かったわけではないのに、店を離れた後、なぜこの2人は急に文通して近況を報告し合う仲になっているの？それが私にはよくわからないが、本作の結末のつけ方としてはいかにもピッタリ。しかし、このように途中で自殺してしまったアンナは別として、ラストでティナとササを描くのなら、同じ店で働いていたメイもラストで近況を語らせなければ不公平なのでは・・・？私にはそんな思いも少し残ったが・・・。

2020（令和2）年3月4日記